

大伴坂上郎女の
「怨恨歌」について

(一) 和歌の伝統との関係

坂上郎女の怨恨歌

押し照る 難波の菅の ねもころに
君が聞して 年深く 長くし言へば
まそ鏡 磨ぎし情を 許してしそ
の日の極み 波のむた なびく玉藻の
かにかくに 心は持たず 大船のた
のめる時に ちはやぶる 神や離けけ
む うつせみの 人か禁ふらむ 通は
しし 君も来まささず 玉梓の 使も
見えず なりぬれば いたもすべ無み
ぬばたまの 夜はすがらに 赤らひく
日も暮るるまで 嘆けども するし
を無み 思へども たづきを知らに
幼婦と 言はくも著く 手童の ねの
み泣きつつ たもとほり 君が使を
待ちやかねてむ (六一九番歌)

反歌

初めより 長くい
ひつつ たのめず
は かかる 思に
会は ましものか

(六二〇番歌)

紀女郎の怨恨歌（一）

よのなかの女に
しあらばわが渡
る痛背の河を
渡りかねめや

（六四三番歌）

紀女郎の怨恨歌 (二)

今は吾は侘びそ
しにける 気の緒
に思ひし君を
ゆるさく思へば

(六四四番歌)

紀女郎の怨恨歌

(三)

しろたへの袖別
るべき目を近み
心にむせひねの
みし泣かゆ

(六四五番歌)

通ひし君が

常やまらず 通ひし君
が 使来ず 今は逢
はじと たゆたひぬ
らし

(五四二番歌)

通ひし君が

人の親の少女見据
急て茂る山辺から
朝な朝な通ひし君
が来ねばかなしも

(二二六〇番歌)

君が来ませぬ

鶯の 通ふ垣根の 卵
の花の うき事あれや
君が来ませぬ

(一九八八番歌)

君が来まさぬ

夕夕にわが立ち待
つにけだしくも

君来まさずは苦
しかるべし

(二九二九番歌)

君が来ませぬ

椽の 袷の衣 裏にせば
われ強ひめやも 君が
来ませぬ

(二九六五番歌)

君が来ませぬ

筑紫道の 荒磯の玉
藻刈るとかも 君は
久しく 待てど来ま
さぬ

(三二〇六番歌)

待つが苦しき

あしひきの 山を木高
み夕月を 何時かと
君を 待つが苦しき

(三〇〇八番歌)

待てば苦しも

天雲の たゆたひやす
き心あらば われを
なたのめ 待てば苦し
も

(三〇三一 番歌)

待たば苦しも

大海の 沖つ玉藻の
靡き寝む 早来ませ
君を待たば 苦しも

(三〇七九番歌)

使の来ねば

あらたまの年はきゆきて
玉梓の使の来ねば霞立つ
長き春日を天地に思ひた
らはしたらちねの母が養
ふ蚕のまよこもり息衝き
わたりわが恋ふる心のう
ちを人に言ふものにしあ
らねば松が根の待つこと
遠く天伝ふ日の闇れぬれ
ばしろたへのわが衣手も
通りて濡れぬ

(三二五八番歌)

使も来ねば

さ丹つらふ 君が御言と 玉梓の
使も来ねば 思ひ病む わが身ひ
とりそ ちはやぶる 神にもな負
せ ト部坐せ 亀もな焼きそ 恋
ひしくに 痛きわが身そ いちし
ろく 身に染み透り 村肝の心
砕けて 死なむ命 急になりぬ
今更に 君か吾を喚ぶ たらちね
の 母の命か 百足らず 八十の衢
に 夕占にも トにもそ問ふ 死ぬ
べきわがゆゑ

(三八一一番歌)

嘆きつるかも

わが背子を 今か今か
と待ち居るに 夜の
更けぬれば 嘆きつる
かも

(二八六四番歌)

ねのみし位かゆ（挽歌）

この月は 君来まさむと 大船の
思ひたのみて 何時しかと わが待
ち居れば 黄葉の 過ぎていにき
と 玉梓の 使の言へば 螢なす
ほのかに聞きて 大地を 炎と踏
みて 立ちて居て 行方も知らず
朝霧の 思ひ惑ひて 杖足らず
八尺の嘆 嘆けども 駿を無みと
何処にか 君が坐さむと 天雲の
行きのまにまに 射ゆ猪鹿の 行
きも死なむと 思へども 道し知
らねば 独り居て 君に恋ふるに
ねのみし位かゆ（三三四四番歌）